



南インドの聖堂の祭り

杉本 良男

今年の8月から9月にかけて、ひさしぶりにインドで「暮らす」機会をえた。

わずか2ヶ月ほどの滞在なので、ホテル住まいの覚悟で出かけたが、幸運にも短期滞在者のためのアパートが見つかった。アパートは、南インドのマドラス市でも随一の高級住宅地ベサント＝ナガルにある。近くには観光地にもなっているエリオット・ビーチがあり、夕涼みにも最適のところであった。

この住宅地のはずれの海岸沿いに、聖母マリアをまつるアンナイ・ヴェーランガンニ聖堂がある。1972年にたてられた歴史の浅い聖堂であるが、1985年には立派な教会も設けられ、しだいにその規模を拡大しているという。この聖堂は、タミルナードゥ州中央部のベンガル湾に面した本家ヴェーランガンニ聖堂のレプリカとしてつくられたものである。このヴェーランガンニ聖堂は、17世紀に創建された由緒ある聖堂で、南インドのみならず全インドに聞こえた有名な聖地として多くの巡礼者や観光客を集めている。この聖堂の由来について、マカオからスリランカ(当時のセイロン)のコロンボにむかって航海を行っていたポルトガルの商船が海岸近くで嵐にあい、遭難しかけていたところにマリアがあらわれ、これを鎮めたという奇蹟譚がよく知られている。

ヴェーランガンニ聖堂では、毎年8月29日から9月8日までの11日間盛大な祭礼が行われる。マドラスの聖堂でもこれとおなじかたちの祭礼が行われており、今年は運良くこれをまぢかにみる事ができた。

初日の29日夕方、マリア像をのせたちいさな山車がでて街中を行進したのち、聖堂の敷地内のポールにマリアをえがいた旗を揚げる儀礼で祭りがスタートした。これより毎日のように特別ミサが行われ、その模様はスピーカーを通じて周囲にも広宣される。祭りのハイライトは9月7日の山車行列(Car Procession)である。この日は夕方のミサの後、ちいさな天使像をのせた車につづき、マリア像をいただく山車が市中を練り歩く。途中でまぢかまえる多くの信者がマリアへの供え物をするすがたをみることができる。さらに信者は翌日の朝の特別ミサのために徹夜の構えで待機する。この最終日9月8日は、ポルトガルの船が海岸に流れ着いたときの「聖母マリア出現の日」にあたり、それが厳粛に祝われるのである。そしてこの日の夜に感謝のミサがあり、初日に揚げられたマリアの旗がおりられ、祭礼は終わりを告げる。

インドの祭りは人であふれかえるのがつねである。マドラスの聖堂の祭礼でも30万人の参加が見込まれており、また本家ヴェーランガンニではその数倍の規模で行われるという。祭礼の期間中、聖堂の周囲には露店の市がたち、深夜までの特別バスで多くの人が集まってくる。人びとはきそって聖母マリアに供物をささげ、また買い物も楽しんでいる。とくに髪の毛を奉納するとご利益があるとされているようで、老若男女を問わず、頭をクリクリに剃って、白檀のペーストをぬったすがたをみることができる。

ヴェーランガンニ聖堂には、キリスト教徒だけでなく、ヒンドゥー教徒やイスラーム教徒の巡礼も数多く集まるという。というより、ヒンドゥー教徒の数はキリスト教徒を圧して、全体の6・7割を占めるとさえいわれる。また、祭礼の日数、旗揚げ、山車行列、髪の毛の奉納などヒンドゥー教の祭りとも共通する点も多い。このような開かれた教会・聖堂がインドのキリスト教の活力を生んでいるのは確かなようである。

(Yoshio SUGIMOTO: 国立民族学博物館助教授, 前南山大学助教授)

漢訳聖書 ~ロバート・モリソンの足跡~

三浦 基

今年度からカトリック文庫プロジェクトとしては、メンバー各人の基礎的な知識を深めることを目的として、大きく4つのテーマを選定した上で少しずつではありますが勉強してきました。その4つのテーマとは、聖書、祈祷書、聖歌集、要理書です。そして今回カトリコス第5号においては、第1のテーマである聖書について取り上げてみたいと思います。しかしこの限られた紙面上で聖書を語るには十分ではなく、我々としてはかなり限定したテーマに基づいて取り組むことにしました。

聖書における幾つかの文献、展示会資料等を調べていくうちに、主に日本に伝来した聖書の中で、その翻訳に多大な貢献を果たした人物が浮かびあがってきました。

- ・Morrison, Robert, LMS(1782 ~ 1834)
- ・Gützlaff, Karl Friedrich August, LMS(1803 ~ 1851)
- ・Williams, Samuel Wells, ABCFM(1812 ~ 1884)
- ・Bettelheim, Bernard Jean(1811 ~ 1870)

の4名です。

その結果、今回カトリコス第5号において、漢訳聖書を初めて手掛けたというロバート・モリソンの足跡を辿ってみようと思います。

日本に聖書が伝来するために非常に重要な役割を果たしたものは漢訳聖書でした。海老澤有道氏の『日本の聖書』の中で次のような記述があります。

「日本における聖書に言及するにあたって、見逃すことのできないものは漢訳聖書である。それは和訳にあたって原典主義がとられたとはいえ、すでに刊行されていた漢訳が参考されたばかりか、聖書の各書名において、キリスト教的術語において、それらを継承したものがきわめて多いからである。へボンが初めて和訳を志したのは漢訳からであり、それなしには、聖書の和訳が困難であった事情なども、それを示す。まったく漢訳聖書がなかったならば和訳はより困難であったばかりでなく、文学的表現においても低からざるをえなかったであろう。」

以下に、その漢訳聖書を手掛けたロバート・モリソンについて触れてみたいと思います。

Morrison, Robert (1782.1.5 ~ 1834.8.1) 漢名:馬礼遜

モリソンは、ノーサンバランド(Northumberland)で靴型職人の子として生まれる。1801年来、19歳のときから長老派牧師レードラー(W. Laidler)に神学を学び、1804年ロンドン宣教会(The London Missionary Society)が宣教師養成のために設立したヴォーグス・アカデミー(Vogue's Academy)に入学し、同宣教会員となった。¹⁾

1807年1月、モリソンはロンドンのスコットランド長老教会で牧師按手を受け、またかねてから中国伝道を志し、ロンドン海外伝道会に加入しており、同年9月4日にアメリカを経て広東に渡来した。そこで2年余りの困難な準備期を過ごし、中国人との接触を図るために東インド会社の通訳官の仕事を引き受け、英華字典の編纂を進めるとともに、使徒行伝の漢訳に着手した。1810年に広東で刊行したのをはじめとして、全く独力で新訳各書を分冊で刊行した。1813年『新遺詔書』8冊を広東から出版した。新約全書漢訳刊行のはじめである。更に旧約の訳業を進め、1815年ごろからミルン(William Milne, LMS, 1785-1822)の協力を得、1823年に『旧遺詔書』、『神天聖書』(『新遺詔書』の改訂版)21本

をマラッカから刊行した。国内では立教大学図書館に全本、京都外国語大学図書館に1巻欠本、東北大学附属図書館に『旧遺詔書』1~3、5~10、14~17本が、聖心女子大学図書館に『新遺詔書』4冊のうち20~21本が所蔵されている。²⁾

モリソンは、はやくから日本で漢文が用いられていることを知り、漢訳聖書を日本にも役立たせようという意図をもっていたということが見逃せないことである。はやくも1818年6月、英国の商船長ゴードン (Peter Gordon) が日本に赴くにあたり、漢訳聖書その他の教書類を託し、ゴードンは江戸湾 (浦賀) に入り、ひそかに船に来た約2千人の漁民にそれらを配付した。そのうち新約は2部あったという。これが『新遺詔書』であったであろうということである。またモリソンはミルンの協力の下にマラッカに英華学堂を設立、東西の橋渡しとなし「遂には地球のはてに住む日本国民と英国国民とが、福音によって平和的に交わる日の来らんことを祈ってやまない」と述べている。³⁾

モリソンがこのように漢訳に着手できた背景として彼がヴォーグス・アカデミーに入学した当時、英国諸教会は海外伝道熱に燃えていたことがあげられる。しかも組合教会のモズリー (Wm. Moseley) が鎖国の清国伝道のため、まず聖書の漢訳の必要性を提言したことも大きかったであろう。この当時、聖書の漢訳は不可能だと考えられていたが、モズリーは大英博物館で『四史攷編』 (Evangelia quatuor Sinié) と題する漢文写本を見出し、更に本書を筆写しているモリソンと出会った。また路上で偶然出会った広東人青年董三託 (Yong Sam-Tak) と相知ることになり、彼をモリソンに紹介することによって漢訳聖書の解説が進められるに至ったのである。⁴⁾ 漢訳聖書の訳業が本格化した経緯は実に神の摂理というべきものである。

1823年に『神天聖書』を刊行した後も改訂を試みていたが、モリソンは1834年52歳にして他界してしまう。その後はギュツラフが中心となってモリソンの念願を果たすべく、モリソン号に乗り込み日本への聖書伝道に専心するのである。その船にはギュツラフについて聖書を和訳したウィリアムズも同乗していた。またモリソン死後、記念事業としてモリソン教育協会 (Morrison Education Society) が設立されたが、それもギュツラフが中心となっており、モリソン記念学校が開校され、やがて校長として聖書和訳の功労者となったブラウンが迎えられているのである。

モリソンは、漢訳聖書を完成しただけではなく、その遺志がギュツラフ、ウィリアムズ、ブラウン、ヘボンと伝えられ、日本開教、聖書和訳の源流をなしたのである。⁵⁾

このようにモリソンの偉業がその死後も継続して進められるに至ったこと、それによって今日の日本の聖書の在り方の基盤を築き上げるに至ったことは、彼の託した夢であり、訳業を通して海外伝道に注いだ情熱が今も様々な形となって受け継がれているのではないのでしょうか。

(Motoi MIURA : 図書館事務課)

註

- 1) 『日本キリスト教歴史大事典』(教文館)
- 2) 海老澤有道著 『日本の聖書』(講談社学術文庫) p. 101
- 3) " p. 102
- 4) " pp. 99-100
- 5) " pp. 102-103

参考文献：門脇 清、大柴 恒著 『日本語聖書翻訳史』新教出版社(1983年)

『日本聖書協会100年史』友愛書房

海老澤有道著 『CLASSICA JAPONICA 第10次 ヴァリア篇 解説』天理図書館 善本叢書 洋書之部 解説10 (1977年)

寄贈資料の紹介

「きりしたん版集成」(故^ハルルド^ド 田坂義雄氏所蔵・田坂捷雄氏寄贈)

「キリッパ版」とは、狭義には1590(天正18)年巡察師^ガリア^アノによって日本に初めて活字印刷機が舶載されてから1614(慶長19)年の大迫害で出版不能に陥るまでの間に出版された書を指し、天理図書館が所蔵するキリッパ版の影印版を「きりしたん版集成」という。全8種9点13冊、付録1冊、解説1冊。内容は『ばうちずもの授けやう』1冊、『精神修養の提要』(ラテン文)1冊、『ぎやどぺかどる上巻』1冊、『おらしよの翻訳』1冊、『こんてむつすむん地』4巻1冊、『太平記抜書』6巻6冊、『落葉集断簡、太平記抜書断簡』、参考として『遣欧使節対話録』(ラテン文)1冊。付録として^ハズ^ス会本部文庫蔵『ぎやどぺかどる下巻』1冊がある。この内、^ハズ^スは重要文化財指定、^ハズ^スは孤本である。

一般信者が、臨終の未信者に授洗する方法・信者には告悔を勧める方法を説明した手引書。
 靈魂を浄める「浄化への道」、諸悪に対する療法・節制による宗教生活への導き、靈魂と神との一致に導く「一致の道」への神秘神学を説いた信心・修徳書。

書名は“罪人の導き”の意の^ポルトガ^ル語。神の尊厳と報恩善行の道を説く信心・修徳書。

きりしたんとしての信仰生活に必要な祈祷文や教義の要点などを集録したもの。

トマス・アケピスの著とされる「キリストに倣いて」の抄訳本。当時きりしたんの間で広く愛読され、訳文の優れていることから、^ハズ^スと共にきりしたん文学書の代表とされている。

平家物語と共に当時最も人気の高かった太平記を流布本から抜粋し6巻6冊にまとめたもの。

「落葉集」は^ハズ^ス会編の漢字字書。

天正の遣欧使節の旅行見聞録を対話録という文学的形式を借りてラテン語で叙述したもの。

カトリック文庫新委員紹介

委員：土屋玲(閲覧・参考係) Tsuchiya, Akira: 普段は閲覧・参考というサービス部門を担当しております。利用者への提供を第一に考え、このプロジェクトにかかわっていきたくと思います。

資料寄贈一覧(1995.12.21現在)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈して頂きました。

ここに御名前を掲載させて頂き、改めて謝意を表したいと存じます。

【個人】

真野和夫氏(名古屋市・南山大学職員)

Fr. 続橋和弘氏(留萌市 カトリック留萌教会)

岡田康男氏(名古屋市)

石川吉紀氏(鎌倉市)

廣瀬義人氏(名古屋市)

編集後記

輝かしい新年を迎えて、この文庫通信もより一層内容の濃いものに仕上げたいと思います。

(M.M.)

編集活動と同時に、今年のカトリック大学連盟図書館協議会の総会・実務研究会に向けて他の方々と共に頑張りたいと思います。

(Y.O.)

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス 第5号 1996.1.1 発行

南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト

編集委員:三浦 基、尾形裕司

〒466 名古屋市昭和区山里町 18

Tel:052(832)3163 Fax(G3):052(833)6986

(タイトルデザイン:加藤富美)